

甦れ大久保伝説

山田兵庫(作家)

およそ日本に住んでいると、やれ汚職だ、やれ不正だなどと政治の腐敗に関するニュースを耳にしない日は無い。最近では神経も麻痺して、昔ほど腹も立たなくなってきたくらいである。

だが、ある歴史小説家の、「改革、革命を断行するのは、非常の時。歴史的に見ても、人を騙すことも必要だし、改革にはそれがつきものである」とのアドバイスに対し、小泉首相が「ハッハッハッ。いやあ、今日は、いい話が聞けました」と返事をしたと知った時は、さすがに悪寒が走った。

『論語』の「民はこれに由らしむべし。これを知らしむべからず」が政治の要訣であることや、首相の言葉の貧しさを別にしても、一国の宰相たる者が、人を騙す必要を公然と認めては、もう日本はおしまいだ。そんな時代だからこそ、「為政清明」を信条としていた大久保利通が気にかかって仕方がない。「為政清明」とは「政治を行うのは清潔で、ガラス張りでなければならぬ」という意味だ。同じ政治家の姿勢でも、騙してハッハッハッとは対極に位置する考えである。

大久保は自分にも他人にも厳しかったが、何事においても、責任というものを真つ正面から受ける姿勢を崩さなかった。内務卿時代、彼が出勤すると、役所内が水を打ったように静かになり、緊張に包まれたという逸話を聞くと、こっちまで背筋がびしりと伸びそうになる。リーダーはかくあるべきというお手本だ。また金銭に対して執着がなく、没後は八千円の借金しか残さなかったという逸話なども、現代の感覚からするととても信じ難い。出身藩を無視し、人材を能力次第で引き上げたことなども、本業よりも派閥争いに明け暮れる連中に聞かせてやりたい。いまや大久保利通は、近代日本の政治史の中では伝説に近い存在だ。ただし前はそうでもなかった。たとえば昭和五十四年(一九七九)、ようやく大久保の銅像が生誕地近くに建立される際にも、地元鹿児島で賛否両論が沸き起こったと聞く。鹿児島では絶大な人気者である西郷隆盛の銅像は、城山の麓に戦前から存在していた。しかし大久保は西郷の

幼なじみであり、同志でありながら、最後には非情にも突き放したという印象が強いせいで、人気も低く、銅像も無かった。よって市民感情を考慮したあげく、大久保銅像は西郷銅像よりもわざと台座を低くして建立したという。滑稽な話だが、いまから二十数年前にはこんな感情論がまかり通って、大久保の評価を歪めていたことに驚かされる。

もう、そんなことを言っている場合ではない。我々は久保利通を学び、日本の将来を考え直さねばならない時に来ている。不思議なことだが、信長・秀吉・家康といった戦国武将や、龍馬・晋作といった幕末志士を「英雄」と仰ぎ、指針とする風潮はあっても、大久保に学ぼうとする姿勢はこれまでの日本には無かった。安っぽい、見せかけだけの「武士道」に酔って、騒いでいる時ではない。情に流され易い西郷隆盛よりも、重大事には逃げ腰の木戸孝允よりも、いま、最も必要とされているリーダーは大久保であると断言しよう。

その基本となるテキストこそが、勝田孫彌『大久保利通』である。明治四十三年(一九一〇)刊、三冊合わせると二千五百頁に達する大著だ。しかも読んで楽しい歴史解説書ではない。日記や文書はもちろん、親族や同志の証言など「生の声」がふんだんに生かされている本格的な政治家の伝記である。辞書を片手に、じっくりと噛み締めながら読む本である。巻頭に、「今日に至りて、遺憾に堪へざるは、利通と最も大関係あり、且題辞を賜はるべき約ありし伊藤博文公が、不幸にして兇徒の為に薨せられ。又、利通と縁故甚だ深く、且題辞を賜はりし岩倉具定公。及、幼時より断金の交誼ありし税所篤子が、前後して薨去せられ、共に其一覧に供する能はざることは是なり」などと述べられているのを読むと、まだ大久保の記憶が鮮明だった時代に書かれたことが分かる。

だが一方で、日本史協会の『大久保利通日記』や『大久保利通文書』といった基本史料が公刊される以前の産物だから、著者勝田の並々ならぬ苦勞は察するにあまりある。勝田もまた、大久保の生涯を後世に残さねばならないという強烈な使命感をもって、本書を書き進めたのだろう。まさに先人が残した遺産である。いまこそ活用せねば、日本の将来は暗いものになってしまう。

あらゆる大久保伝の

限定三八〇部復刻

(番号入)

原典にして最高峰!

勝田 孫彌 著

大久保利通傳



全三巻



マツン書店

久光上京の途に上る

第五章 久光の上京

初め久光の發途は、二月二十五日と決定し居たりしが、會西郷が大島より歸麿するに及び、更に延期して、三月十六日に出發すべしと定めたり、依て三月十六日に至り、御側役小松帶刀以下九百八十餘人を従へて、愈鹿兒島を出發せり、利通は當時御小納戸にして中山と同役なりしが、共に久光に隨從したり、藩廳には家老喜入攝津等忠義を輔佐したり、久光が上下千餘人を従へ、威儀堂々として愈發足せりとの報四方に聞ゆるや、諸藩の志士等は陸續として京攝の間に雲集したり、

是より先き、西郷は命を奉じて九州諸藩の形勢、及志士の動靜を視察し、三月二十日馬關に至れり、然るに、當時諸藩の志士等、京阪を指して發足するもの多く、平野次郎、小河一敏等もまた馬關を経て上京し、久光の着京を俟ちて、將に一大事變を起さんとする狀況なりき、西郷は此形勢を見て、自ら京攝の間に出て、其動靜を探り、大に盡力する所あらんとて、即日森山新藏、村田新八等を伴ひて馬關を出發し、二十六日大阪に着き、次で伏見に至れり、

第四篇 勤王時代(其三) 第五章 久光の上京

一五

西郷伏見に到る

長州に到りて王政復古の決す策を交渉

第七篇 勤王時代(其六) 第五章 王政復古の準備

一六

九月十五日、大阪を出發して歸帆の途に上り、利通は大山及當時薩邸に潛居せし長藩士伊藤博文、品川彌二郎と共に、此日薩藩の汽船豐瑞丸に乗船して大阪を出發し、十六日三田尻に着き、翌十七日山口に至り、即夜木戸廣澤の兩士と會合したり、

是より先き、長藩勤王黨の首領高杉晋作は馬關に病死し、木戸廣澤の兩士は、當時同藩勤王黨の領袖なりき、木戸は先づ利通等遠來の勞を慰し、又藩主毛利侯の命を傳へ、十八日に侯は利通を引見して、京師の形勢、及王政復古を實行すべき順序方策を聽聞あるべしと告げたり、依て十八日、利通は大山を伴ひて毛利侯父子に謁せり、此日は、長藩の家老及木戸廣澤等も列席したり、利通は先づ天下の形勢を説き、京師の情況を述べ、又春嶽久光等が斡旋盡力したる事情、及幕府が益其勢威を回復せんとする舉動に關して、詳細に辯ずる所あり、反復問答の末、遂に長藩も斷然出兵すべしと確定したり、抑も薩長二藩の志士の間には、既に熟議せし所なれども、兩藩の間に公然交渉を開きて、王政復古の決事を協定したるは、實に此時を以て初めとす、毛利侯は、利通が重大なる使命を帯び、遠く山口に到れる勤勞を謝して、來國俊の短刀を與へ、又久光父子へも贈る所ありき、



勝田孫彌 『大久保利通伝』の復刻に寄せて

国士舘大学文学部教授 勝田政治

明治維新の全過程を担う

二〇〇三年一月から二月にかけて、NHKの歴史番組「その時歴史が動いた」は、「日本の歴史を動かした」と考えられる人物についてのアンケートを実施した。その結果、大久保利通は第一七位となっている（NHKのホームページ）。同時代の明治維新期の人物で、大久保より上位にランクされているのは、第二位の坂本竜馬（第一位は織田信長）、第九位の西郷隆盛、第一〇位の徳川慶喜、第一一位の勝海舟、第一二位の新選組（グループだが）、第一六位の吉田松陰である（大久保の次の第一八位に高杉晋作がおり、伊藤博文が第二二位、木戸孝允は第三四位となっている）。

こうしたアンケートに見られるように大久保利通は、「専制主義者」・「官僚政治家」・「冷血漢」・「非情」などというマイナスイメージが先行しているのか、いつも坂本や西郷らの後塵を拝しているのである。しかし、大久保は明治維新という一大変革を最も主体的に担った政治家である。幕藩体制の崩壊から近代国家の形成という全過程にわたって、つねに中心的位置を占め続けた人物として、大久保以外に誰を挙げ得るのであろうか。大久保は再評価されてしかるべき人物である。

歴史家勝田孫彌

その大久保を「維新の元勳、明治政府の建設者」と的確に評価している勝田孫彌『大久保利通伝』は、大久保の事績を理解するにあたって古典的位置を占める名著である。

『大久保利通伝』は、一九一〇（明治四三）年から翌一一（明治四四）年にかけて刊行された、大久保の最初の伝記である。著者の勝田孫彌は、一八六七（慶応三）年に大久保と同じ鹿児島に生まれ、明治法律学校（現明治大学）で法律を学んだ後、明治維新史研究に転じて一八九四（明治二七）年から九五（明治二八）年に『西郷隆盛伝』（全五巻）を刊行した。そして、『大久保利通伝』を著した直後の一九一一（明治四四）年、維新史料編纂会が設立されると編纂官、さらには委員（役員）となって明治維新史料の蒐集と整理にあたり、一九四一（昭和一六）年に亡くなっている。このように勝田孫彌は、明治中期から昭和初期にかけての代表的な明治維新史研究家なのである。

『西郷隆盛伝』は、「根本史料を用いた」明治以降の人物の伝記として「最初」の書物であり、「実証的な人物伝として注目すべき」ものであり、薩摩藩中心ではあるが「幕末・明治初年史の体系を新しく構成」した業績として、「エポックメイキングな基礎工作」であると評価されている（大久保利謙『日本近代史学の成立』）。『大久保利通伝』もこの実証史家勝田孫彌の手になるものである。復刻にあたって『大久保利通伝』の有する価値をいくつか指摘し、推薦の言葉としたい。

本書の価値

第一は、実証主義が貫かれた最も精緻な大久保の伝記ということである。上巻が六九一頁、中巻が八七六頁、下巻が八二七頁、総計二二九四頁に及ぶ大著である。日記や書簡を丹念に調べ、それらを初めて史料として用いて全生涯の足跡を克明に追っており、これを凌駕するような評伝は現在においても存在しない。誕生から王政復古までの時期が全一篇中七篇までを占めているように、幕末期の記述は詳細を極めている。

第二は、大久保以外の史料も広く蒐集・紹介しており、明治維新史料集となっていることである。島津家文書・三条家文書・岩倉具視文書・伊藤博文文書・黒田清隆文書・吉井友実文書など「引用書目」として、一五七の「書目」が掲げられている。現在でも刊本に収められていない文書が含まれており、明治維新史研究者にとつて必携の書となっている。また、当時の状況を伝える貴重な写真を収めていることも、史料集としての価値を高めている。

第三は、政治家大久保像を打ち出したことである。自由民権運動や士族反乱という反政府運動のなかで大久保は、「有司専制」・「専制主義者」として批判されてきた。そうした中、「明治の大政治家」であり、「実に政治家の典型と称すべき」であると大久保を評価し、末尾の一文は「政治家として最も責任を重んじ、進んで国難に当たりし忠誠に至りては、古今多く其比を見ざるなり」と結んでいる。その後の地辺三山『明治維新 三大政治家』から、戦後歴史学における

政治家としての大久保研究の基礎を提供している。
第四は、大久保の伝記にとどまることなく、薩摩藩を中心とする一つの明治維新史研究となっていることである。維新研究史上の観点から検討に値する古典であり、史学史研究の対象としても貴重な業績である。

再評価の機運 本書は一九七〇（昭和四五）年に臨川書店から一度復刻されただけで、永らく入手困難であった。混沌として逼塞感の強い現代日本において、大久保の事績から学ぶことは多い。今回の復刻が大久保研究を前進させ、さらには再評価の気運を高めることを期待してやまない。研究者のみならず、明治維新に関心をもつ人々に広く推薦したい一書である。

（小見出しはこちらで付けて頂きました。マツノ書店）

日本再生の切り札、こんな宰相が欲しい！

三月三日のNHK「その時歴史が動いた」締め言葉を紹介します。

仁政を指向する大久保利通の人間性と柔軟な政治感覚を端的に示し、

これまでの誤ったイメージを一新するに余りある史料かと思えます。

明治七年、北京談判の決着後間もなく、同郷の黒田清隆宛の「極秘」と記された手紙に大久保は、苦心して得た五十万両の使途についてこう書いていた。

「償金五十万両をどう使うかは、日本の名誉に関わる。そこで十万両は、被害者と戦病死した出兵兵士および功労者に使用するが、残り四十万両は、清国へ「謝却」すべきだ。何故か。そもそも出兵の趣意は、内外「人民の保護」と台湾原住民の開化および航海の安全にある。したがって四十万両は清国がそれらに使うようにすれば良いことだから、日本が受け取ることはない。償金の返却は、西洋文明諸国もいまだかつてしたことがない。「剣」で敵国を「退治」するよりも、この「大断」により、日本の盛名は輝き「宇宙間」の快事となるう」（勝田政治著「政事家」大久保利通」講談社より。勝田氏はこの番組の制作にも関与されました）



大久保家蔵

大久保利通傳 目次

上巻

- 第一篇 幼少時代
 - ①清水谷 ②利通の郷里と其家系 ③利通の両親 ④利通の幼時 ⑤時代と精神の修養（其一） ⑥時代と精神の修養（其二） ⑦子老の遠島 ⑧謹慎中の利通
- 第二篇 勤王時代（其一）
 - ①齊彬襲封 ②利通父子の赦免 ③有志者の出府及藩政革新の計画 ④齊彬の経綸策 ⑤安政の大獄 ⑥齊彬の死と薩藩の形勢
- 第三篇 勤王時代（其二）
 - ①薩藩志士の突出 ②久光藩政を改革す ③利通出府を計る ④利通志士の勃興を制す ⑤忠義の参府と桜田事件
- 第四篇 勤王時代（其三）
 - ①藩論の一致を計る ②久光上京に決す ③利通の上京 ④久光上京前の形勢 ⑤久光の上京 ⑥久光の入京と寺田屋事件 ⑦大原勅使の東下 ⑧勅使の東下と幕政改革 ⑨勅使の帰京と薩長の不和 ⑩久光の帰国
- 第五篇 勤王時代（其四）
 - ①京師の形勢一変す ②利通の上京 ③將軍の上洛 ④久光の上京 ⑤將軍の帰東 ⑥薩英戦争 ⑦京師の事情 ⑧久光の上京 ⑨生麦事件の終局 ⑩公武一致論
- 第六篇 勤王時代（其五）
 - ①藩論一変 ②京師の騒乱 ③利通藩政を改革す ④長州征討 ⑤長州再征の議及五卿事件 ⑥長州再征の議及外船入損

中巻

- 第七篇 勤王時代（其六）
 - ①薩長連合と五卿事件 ②長州再征と薩藩出兵の拒絶 ③王政復古の議 ④四侯の国是論 ⑤王政復古の準備 ⑥王政復古
- 第八篇 在朝時代（其一）
 - ①大革新後の形勢 ②戊辰の破裂 ③政府の状況と遷都の議 ④徳川征討と対外問題 ⑤親征 ⑥徳川処分 ⑦江戸在勤 ⑧車駕東幸 ⑨箱館戦争
- 第九篇 在朝時代（其二）
 - ①版籍奉還と利通の帰藩 ②車駕東幸と利通の大廟参詣 ③政府の改革と国是決定 ④政府の改革利通待詔院出仕と為る ⑤英国皇子来航 ⑥論功行賞及遷都 ⑦利通木戸と帰藩す ⑧政府の改革と民蔵分割論 ⑨大変革及廢藩置県の準備 ⑩大変革及廢藩置県

下巻

- 第十篇 在朝時代（其三）
 - ①全権大使欧米派遣 ②欧米巡回中内地の事情 ③征韓論と内閣の破裂 ④征韓論後の事情 ⑤利通内務卿としての為る ⑥佐賀の役 ⑦台湾事件 ⑧久光の建言及利通の辞表 ⑨台湾征討と北京談判
- 第十一篇 在朝時代（其四）
 - ①大阪会議 ②明治八年の政変 ③聖上利通の邸に幸す ④聖上東北巡幸 ⑤利通と勸業 ⑥政府の改革と地租軽減 ⑦西南戦争前の事情 ⑧西南戦争の発端 ⑨西南戦争 ⑩利通と鹿児島 ⑪戦後の事情と利通の経綸策 ⑫遭難
- 結論

復刻に寄せて

曾孫 大久保利泰

■本書は改めてご紹介するまでもなく、「大久保利通傳の原典」として、永らく復刻を待たれていた決定版です。

■このたび復刻用の原本には、明治維新史研究の泰斗として知られた故・大久保利謙先生の蔵書を使わせて頂きます。

■装幀家毛利一枝さんによる圧倒的な存在感あるデザインは、本棚に並べても大いに満足頂けると自信を持っています。

■「大久保利通文書」はこの三月、国の重要文化財に指定されました。近く「大久保利通文書」全十巻を復刻させて頂くためにも、何とかこの「大久保利通傳」の復刻事業を成功させたいと思っております。

■なるべくお得な二〜三点セットでお申し込み下さい。

■なお「推薦文」の筆者勝田政治氏は、著者の勝田孫彌氏とは無関係です。

■体裁 A5判上製箱入二千五百頁

■定価 四万円（税・送料）

■予約特価 三万円（同）

■特価締切 平成十六年五月末 厳守

■発売 平成十六年七月中旬 予定

■限定三八〇部復刻（番号入）

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

周南市銀座2-13

☎〇八三四〇二九五

マツノ書店

URL <http://www.matsuno.com>